

令和5年度第2回
総合教育会議 会議録

開催日 令和5年12月20日

南あわじ市教育委員会
南あわじ市・洲本市小中学校組合教育委員会

令和5年度第2回南あわじ市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和5年12月20日(水)
午前10時00分 開会
午前11時55分 閉会

2. 開催場所 南あわじ市役所 第2別館 第5会議室

3. 協議事項

(1) 人と関わる力について

- ・防災教育の視点から
- ・アフタースクールの視点から

4. 出席又は欠席した構成員氏名

出席構成員

<南あわじ市>

市長	守本 憲 弘	教育長	浅井 伸 行
教育長職務代理者	青木 京	教育委員	數田 久美子
教育委員	近藤 宰 常	教育委員	山本 真 也

<学校組合>

管理者	守本 憲 弘 (兼務)	教育長	浅井 伸 行 (兼務)
教育長職務代理者	狩野 時 夫	教育委員	青木 京 (兼務)
教育委員	山本 真 也 (兼務)	教育委員	本條 滋 人

5. 事務局関係職員氏名

総務企画部付部長	家田 和 幸	ふるさと創生課長	秦 伸 行
教育次長	福田 龍 八	教育次長補兼学校教育課長	上原 泉
教育総務課長	秀 充 浩	社会教育課長	山家 光 泰
体育青少年課長	阿萬野 真司	教育総務課係長	佐々木 友 美
教育総務課主任	大西 重三子		

1 開 会 午前10時00分

【秀教育総務課長】 定刻になりましたので、ただいまより、令和5年度第2回南あわじ市総合教育会議を開催いたします。

【秀教育総務課長】 本日の会議を傍聴される方は、南あわじ市総合教育会議傍聴要領に準じて傍聴されますようお願い申し上げます。

2 市長あいさつ

【秀教育総務課長】 開会にあたりまして主催者であります、守本市長よりご挨拶申し上げます。

【守本市長】 本日はご多忙の中、お集まりいただきありがとうございます。

今回のテーマは「人と関わる力について」です。「学ぶ楽しさ日本一」は、児童生徒だけではなく、教職員や市民の皆様にも学ぶ楽しさを実感できる環境を作るために進めておりますが、この度、「人と関わる力」を取り上げさせていただきました。このテーマは、まずは事務局の方で考えてもらい、私もこれでいきましょうということになりました。その背景には生成AIの普及があります。私も生成AIがどのくらい活用できるのだろうと試しているところですが、ここ半年の間に急速に進歩していると感じており、様々なことに活用できるようになってきております。私が就職したのは1984年ですが、その年にはオフィスにワープロが導入された年でした。そのことにより、各局に2人ずついたタイプライターを打つ人の仕事がなくなってしまいました。また、2000年前後にはEメールがオフィスで使われるようになったことで、就職1年目の職員が資料を持って廊下を走り回る「廊下とんび」がいなくなりました。それによってドラスティックに仕事の効率が変わりました。電話や資料のやりとりがメールでされるようになったのです。その時のインパクトと同じか、またはそれ以上のインパクトを生成AIの誕生に感じております。生成AIにより事務作業のかなりの部分を置き換えることができますし、政策の立案のために、なにを考えればいいのかというところまでコンピュータがやってくれるという時代がやってきたと感じています。そのような状況の中で人間に何ができるのか、コンピュータにできないことは何かと考えると、思い描く理想の姿、ありたい姿といった人間の望みはコンピュータには描けない。さらにそこに行くために何が必要かという問いの設定もコンピュータには描けないのではないかと思います。コンピュータが出してきた選択肢を基に、評価して決めるのは人間です。また一番大事なところは、コンピュータは実行してくれ

ないということです。実行するのは人間にしかできません。ここに深く関わるのが「人と関わる力」で、人を動かす、人を巻き込んでいく、壁にぶち当たっても乗り越えていく、これが人間に残される仕事になっていくのではないかと思います。

そう考えていくときに、「学ぶ楽しさ日本一」はフィットした考え方だと思いますし、人と関わる力がどのように育っていくかを取り上げて議論していくことに意味があるのではないかと考えています。

それではここで、最近の南あわじ市の特徴的なイベントについて紹介させていただきます。

去る11月26日に近畿高等学校駅伝競走大会が南あわじ市で開催されました。本年度は、初めて私も関係車両に同乗させていただき、トップ選手の後ろを随行していく位置から、選手の一生懸命走っている姿を間近で拝見しました。周りで応援する人もたくさんいらっしやって、非常に盛り上がった大会であったと感じました。また、人間の力の限界に挑戦する姿はとても美しく感じました。

次の話題として、本市では、学校給食で地場食材を積極的に活用する取組を進めております。12月12日に、淡路島全体で同じ給食をとということで、淡路島牛井とかわりなますが提供されました。私もいただきましたが、現在の子どもたちは地場食材をふんだんに使った給食を日々食べることができてうらやましいと感じました。この日は、福良小学校で、福良こども園の園児や福良小学校の児童が、実際に牛を見て、触れる機会が設けられました。日頃は意識することのない、動物や植物の命をいただいて生きているということに気づく重要な機会であったと思いますし、命に感謝する気持ちを感じてもらえたかなと思っています。今年度は市内小中学校の全学級に「子どもたちに届けたい地元の食材」のポスターを掲示しました。QRコードを読み込むと市のホームページにつながるようになっております。そこから食材にまつわるコンテンツが掲載されており、食育授業に取り入れたり、自学に活用したりということができるようになっております。

次の話題です。12月3日には、夢プロジェクトで少年野球教室を開催しました。丸山工務店の社長様にご支援いただき、オリックスバファローズの選手から子どもたちが直接指導を受けました。自分になりたいもの、ありたい自分を思い描いてもらういい機会になったのではないかと思います。今年のプロ野球はオリックスがパリーグ3連覇を成し遂げましたが、セリーグでは、南あわじ市出身の村上選手が史上初の新人王とMVPを同時受賞されました。市としても横断幕を設置して応援しておりますが、今後のご活躍にも期待したいと思いますし、村上選手が地元に戻って来て子どもたちに接する機会なども積極的に作っていきたいと思っております。

それでは、さっそくここから協議に入っていきたいと思っております。

本日はどうぞよろしくお願いたします。

3 議 事

【秀教育総務課長】 本日の協議事項に入ります。

協議事項につきましては事務局からご説明申し上げますので、進行につきましては守本市長、よろしくお願いいたします。

【守本市長】 それでは次第に従いまして協議事項に移ります。

「人と関わる力について」、事務局より説明をお願いします。

まずは、「防災教育の視点から」の説明をお願いします。

1. 人と関わる力について

(1) 防災教育の視点から

【上原次長補】 資料をご覧ください。南あわじ市の防災教育には、2つの重点目標があります。「自らの命は自らで守る力をつける従来の安全教育に加え、人としての生き方・あり方を考える防災教育を推進する。」「児童生徒自らが、将来的にわたって主体的に南あわじ市の防災に関わり、協働して安心・安全なまちづくりに貢献しようとする意識を高める。」ことです。そして人とのかかわりを通して、児童生徒が仲間と協働する楽しさを感じ、活躍の場を創出していくことを進めております。

主な事業として6つ挙げております。「防災パートナーシップ協定」では、特に「仲間と協働してやり遂げる楽しさ」を意識しております。市内の内陸部と沿岸部の中学校でペアを組み、緊急時や災害時に相互支援をする「防災パートナーシップ協定」を結んで活動することを想定し話し合うことを、新生徒会になった時に実施しています。

「東北ジュニアリーダー研修」では、特に「本物にふれる楽しさ」に重点を置いております。避難所運営の体験談や大川小学校の震災当時の状況、震災以前の様子等のお話を聴き、南あわじ市の防災に活かすため対話し、新聞にまとめ、伝え、広げる取組をしております。添付しております「青いこいのぼり新聞」は、中学生が自身の考えや意見をとりまとめて作成したものです。

「ユース防災プロジェクト」では、特に「困難なことにもチャレンジする楽しさ」に重点を置いております。大学生・高校生が企画運営するユース防災プロジェクトを今年度立ち上げまして、小中高大学生がともに研修やワークショップ等を通して防災を自分事として考え、市長に提言いたしました。社会に参画する意識を高める場となりました。

「舞子高等学校防災出前授業」につきましては、「夢や志を見つけ、社会に貢献する

楽しさ」に特に重点を置いております。

「子どもたちとともに作り上げる地域防災訓練」は、地域の人と関わる参画の場として位置づけております。

「教科授業等での取組」では、自然学校内での防災教育については、以前から長らく実施しておりますが、各校でも「防災プログラム」の実施を図るために、全教員が一人一防災に取り組んでおります。

これらの取組により、社会参画の体験やホンモノとの出会いを通して子どもや教員の心に火を灯すこととなり、様々な成果が出ております。防災ジュニアリーダー養成講座を始めて7年目になりますが、児童生徒の主体的な取組が育まれてきております。その一例としましては、国内海外でおきた災害に対し学校内を中心に募金活動をし、届けた学校がありました。また、児童生徒が企画運営する「学ぶ楽しさ支援センター記念事業防災フォーラム」では提言をやり遂げました。これらについて、何かを成し遂げるといった達成感が得られたという児童生徒の感想が多く見られました。

ワークショップにおいても、想像力を働かせての活動が多く見られました。地域の人に自分たちの意見を聞いてもらえるという経験は、社会に役に立つことをしたいと思う子どもたちを育むことにつながっております。さらに、子どもたちが主体で防災を通したまちづくりの企画運営をさらに発展させていくことを今後も続けたいと思っております。

課題については、「地域社会に何かしてみたいか」という問いに対する市内児童生徒の回答は、69.9%と国よりも高い伸びを見せています。しかし、地域のために何かできることはないかと思っているにもかかわらず、大人にしてほしいことを要求するにとどまっています。今後、「自分の行動で社会を変えられると思う」という思いを持てる気持ちを育む取組を進めていきたいと思っております。

(2) アフタースクール事業の視点から

【守本市長】 次に、「アフタースクール事業の視点から」の説明をお願いします。

【阿萬野課長】 アフタースクールは、学童の児童を含めた全ての児童を対象に、放課後などに専門講師や特技を生かしたまちの先生による多種多様な体験プログラムを提供する事業です。

放課後児童健全育成事業いわゆる学童保育は、保護者が労働等により昼間家庭にいない児童を対象に、放課後などに生活の場を提供する事業です。放課後子ども教室事業は、工作などの遊びを通じて子どもの居場所を提供する事業です。この二つの事業の良いところを融合した南あわじ市独自の事業がアフタースクール事業です。

目的としまして、放課後の時間に、遊びを通じた多種多様な体験活動によって「な

りたい自分を見つける」ことができる居場所となることをめざし、まちの先生といわれる地域の人が講師となり、体験プログラムを提供してくれる映像制作会社やFC・AWJといったプロサッカークラブなど、市内の企業や関係機関とも連携を図りながら、学ぶ楽しさを通じて、子どもたちの自主性・積極性・コミュニケーション力などをはぐくむことを目的として実施しています。そして、子どもたちが様々な体験プログラムを受ける中で、今回のテーマである「人と関わる力」を養っていけると考えます。

アフタースクール事業の特徴として、学ぶ楽しさを実感することができる環境づくりと、放課後の居場所づくりを併せ持つことが重要と考えます。そのためには、次の点について配慮してまいりました。①放課後の有効活用として、子どもたちが自由にできる時間。②教えてもらう環境から、主体的に自分が楽しいと感じる環境へ。③子どもたちが集まり、知恵を出し合っって色々な体験ができる居場所。④地域の方との出会いの中で、子どもたちの新しい可能性が見つかっていく体験。⑤まちの先生など地域の方々が活躍できる場所。⑥子育ての喜びが見える場所。これらの6点です。

次に、具体的なプログラムが、学ぶ楽しさの8項目にどうあてはまるのかを考えてみました。例えば、だんじり唄であれば、学ぶ楽しさ5の「故郷をよりよく知る楽しさを体験する」にあてはまり、プロサッカーチームFC・AWJの運動教室では、学ぶ楽しさ7の「本物にふれる楽しさ」にあてはまります。それぞれのプログラムが8つの「学ぶ楽しさ」のどこにあてはまるのかを考えたときに、多種多様なプログラムが子どもたちにとって、人と関わる力に多面的にあてはまることがわかります。言いかたを変えると、様々な体験プログラムを受ける中で、人と関わる力が養われていくようになるということです。

また、アフタースクール事業では、提供された体験プログラムの中から、自分のやりたいことを自ら選んで体験できますが、現在取り組んでいるのは子どもたちが自ら考えたプログラムを実施することへ発展させていくということです。この取り組みは、「リクエストプログラム」「子ども会議」「キッズタイム」というように、拠点によって呼び方は違いますが、子どもたちがやりたいことを自分たちで考えて体験できるようになるものです。

成果としましては、アフタースクールの様々な講座を通じて、児童は自分の好きなこと、やりたいことに気づき、熱中、没頭していました。また、様々な人との関わりの中で子どもたちが成長し、「人と関わる力」を向上させることができていると感じています。多彩なプログラムを提供する講師と、違うクラス、違う学年、違う学校の児童とのかかわりを通して、協力してやり遂げたり、自分を表現したり、人から認められる体験を重ねることで自己肯定感を高めることができたと思います。

具体的には、ダンスプログラムの中で、振り付けを自分たちで考えさせました。子どもたちは没頭して取り組んでいましたが、考え方の違いなどもあって、完成するの

に時間がかかりました。しかし、協力しながら意見をぶつけ合ってやり遂げた後には、できない子どもに教えてあげたり自分独自の動きを加えたり、実に楽しい時間を過ごせていたと思います。間違いなくこの体験によって人と関わる力の向上につながったと感じています。

アフタースクール事業に参加する子どもたち、保護者、まちの先生のそれぞれの視点から、「アフタースクールってどんなところ？」というお話を聞きました。それぞれの立場から聞いた生の声が、最もアフタースクール事業を端的に表現していると思いますので紹介させていただきます。

6年生児童からは、「プログラムが楽しそうだと思ってアフタースクールに参加しました。ダンスのプログラムが好きで、先生に教わったり、振り付けを自分たちで考えたりします。いろいろなプログラムがあって、参加も自由にできるのがアフタースクールの良い所です。年下の子とも仲良くなれて、学校であった時も話しやすいです。」との声を聴くことができました。まさにこれが、アフタースクールがめざす姿です。主体的な学びを深め、なりたい自分になれることで、学ぶ楽しさを実感し、異年齢の子どもたちと関わりあい、仲良くなれることを証明しています。

プログラミングを教えるまちの先生からは、「自分も楽しみながら伝え、子どもたちと同じ目線で話すよう心がけています。最初は指1本でキーボードを押していた子ども、両手を使ってタイピングできるようになりました。子どもたちの考え方や個性がプログラミングにも出ていておもしろいです。学校の授業でも役立つ考え方を学んでくれればと思っています。」という声がありました。まちの先生としてアフタースクールに携わる地域の方々にとっても、子育ての喜びが見える場所になっています。教える側も楽しむことができるのがアフタースクールの特徴でもあります。

小学2年生の保護者からは、「アフタースクールは学童保育と違い、遊びや学びなどプラスのことがあると思いました。息子は将棋やスポーツのプログラムが好きで、自分でプログラムの予定表を見て、喜んで参加しています。家でもアフタースクールでの出来事を教えてくれるので、私も息子の話を楽しみに迎えに行っています。」という声をいただきました。保護者にとって学童保育との違いを実感し、子どもの成長を実感できる存在がアフタースクールです。

最後に今後の課題として、施設の物理的な充実や、スタッフやプログラムの充実が挙げられますが、これらはNPOからの助言や支援を得ながら改善を図っているところです。現在、アフタースクール事業に参加する児童及び保護者を対象にしたアンケート調査を準備しています。満足度100%をめざしますが、自分のやりたいことができるアフタースクール事業の満足度が100%なのは当たり前と考え、これをどう続けて行けるのか、今後にどのように繋げていくかが本当の課題と考えます。

また、アフタースクール事業を終了した子どもたちが中高生になって、ボランティアとして協力してくれたり、将来まちの先生として自分が楽しい体験をしたことを次

の世代に引き継いでくれたりすることを期待しています。

以上で、アフタースクール事業の視点から見た人と関わる力についての説明といたします。

【守本市長】 説明が終わりました。

それでは、順に委員の皆様のご意見をおうかがいしたいと思います。

【近藤委員】 教育委員として、学校訪問、淡路三原高校の提言発表、淡路地区教育委員研修等の活動に参加させていただいております。今年度、阿万小学校を学校訪問し授業を見させていただきましたが、非常に見事な授業でした。今課題となっている「主体的で対話的な深い学び」が実施されていました。小集団での活動や話し合いができており、年々授業もバージョンアップしています。これは特定のクラス、特定の学年だけではなく学校を挙げて同じ方向を向いて取り組んでいると感じました。

大谷選手がドジャースへの移籍を決めた理由を聞かれた際、「オーナー以下みんなが同じ方向を向いているからだ」という発言があったそうですが、まさにそのとおりで学校全体が同じ方向を向いている。ここで学ぶ子どもたちは幸せだと感じました。

「人と関わる力」は、社会人となった時にも発揮されるものだと思いますが、その基礎や原動力となる力を学校教育の中で育み、児童生徒の発達段階に応じて意図的、計画的に育むことが大事だと思います。そして様々な体験活動を通して人と関わることの楽しさを経験していくのだと思います。

「人と関わる力」の基礎として、学校生活を円滑に営んでいく力、学習活動を的確に進めていく力、これらが小学校低学年から6年生になるまで計画的に進められている素晴らしさを学校訪問で感じました。

防災教育に関しては、「未来は自分たちで作る」という説明をお聞きして、非常に力強く感じ、そのような意識を大人が育んでいかなければならないと感じました。

不登校という観点からお話させていただきますと、先日、板野町子ども家庭センターへ淡路地区教育委員の研修で訪問させていただきました。そこでは、eスポーツが導入されており、eスポーツ用のゲーム機とゲーム用チェアが数セット置かれておりました。居場所を提供するという意味もあるのかなと思いました。また、12月に入って、OECD学力調査の結果についての新聞記事がいくつか出ていました。子どものために様々な取組を学校が進める中で、いろいろな能力を身につけてほしいという思いから学校教育を頑張りすぎることで、かえって学校が息苦しい場所になっているのではないかと指摘が書かれていました。先ほどお話しした阿万小学校のように子どもが自分の意見を言えるし人の意見を聞ける習慣を早い段階から獲得することで、不登校の予防になるのではないかと思います。防災教育やアフタースクール事業のように子どもだけでなく大人や地域の人との体験を通して学んでいくことにより、不

登校を解消できるきっかけにもなるのではないかと思います。新聞記事では学校のスリム化にも触れられていました。アフタースクール事業のように地域でできることは地域でという取組が進むと、学校をスリム化できるのではないかと思います。

様々な体験を通して、自分が多くの人から声をかけられて大事にされていると実感できる体験をした子どもは、大人になってからも間違った方向には進まないということを実感したことを特別支援教育の専門家から聞いたことを思い出しました。今後もこれらの取組が充実してほしいと願っています。

【數田委員】 南あわじ市で徹底的に防災教育が始まってから、子どもたちの中にも防災に対する関心が高まっていると感じています。地震や戦争のニュースにもすぐ反応し、これらの出来事のその後にも意識が向けられるようになったことは、南あわじ市が年々防災教育に取り組んできた成果だと思います。一方で、特に中学生などは武器を持って戦うようなゲームの影響もあってか、戦争があつて当たり前のような意識になっていないだろうか、戦争の本質を見落としているのではないだろうか、と感じます。不登校、いじめは小中学校とも増加傾向にあります。本当に人が困っているということ、世界にはこの瞬間にも悲惨な状態にある人がいるということに対して、本心から心が動いていないのではないかと心配しています。イラク戦争の時、夜間にイラクへミサイルを撃ち込んでいる戦闘機の中のアメリカ兵が、ミサイルが爆発して火花が散っているのを、クリスマスのイベントみたいだと表現したという話がありました。撃たれたミサイルが落ちた場所でどれだけ悲惨なことを巻き起こしているかという想像力が欠落しているのではないかと思います。豊富な知識を持っていても想像力が貧弱なのではないか、創造力のなさが、人間を残酷にし、残虐な行為を平気でしてしまうのではないかと懸念しております。これらが不登校やいじめにつながっていないかを心配しています。自分たちで考えて相手の気持ちを思いやったり、言葉を聞いて想像したりすることや、言葉の裏にある情景や気持ちを想像することは大事です。今南あわじ市では読み聞かせに取り組んでいますが、非常に大事なことだと思います。それがどんどん人間性の豊かさにつながってくればと思います。

アフタースクール事業でも、例えば言葉を使った創作活動などに取り組んでいただければと思います。淡路島は、永田青嵐さんの故郷で俳句が伝統としてありますので、俳句や短歌といった言葉を使ったプログラムなどがあればいいのではないかと思います。また、保護者への手立ても課題です。親は自分や家のことなどで忙しすぎて子どもを見る時間がなく、子どもたちはゲームなど自分たちのしたいことをしています。その中で会話する機会が少なくなっているのではないかと思います。子どもたちが、保護者と関わる時間が減少している状態にあるということを保護者が認識しているのか疑問です。日々に追われて「早く、早く」という言葉でせかし、子どもはその言葉にバタバタとしています。まずは保護者が子どもとの関わり方を考えていく必要が

あるのではないかと思います。

【青木委員】 私は、「関わる」ということについて考えていました。「関わる」という言葉を分解してもいいのかなと思っていて、「私は関わっている」「この人はこんなふうに関わっている」ということについて、子どもを交えて一緒に話し合ったりワークショップをしたり、ということができたらいいのではないかと思います。それらを学ぶ楽しさ支援センターで考えたり話し合ったりできればと思います。現状で、学ぶ楽しさ支援センターは十分活用されていると思えてなくて、もっと活用できるはずです。教育委員会には子どもの気持ちがる先生方がいらっしゃいますから、ぜひセンターに配属していただいて、そこに行けばそういう話ができるんだという場所になっていくともっと推進するのではないかと思います。

数田先生がおっしゃったとおり、子どもと保護者との関係が気になっていて、子どもから、「あの家、親とうまく行っていないねん。」という話を聞くことがあります。学校の先生から保護者へお叱りの電話があったとしても、「表面的に謝っておけば済むから。親も出てこないし。」ということもあるようです。保護者の関わり方の幅が家庭によってかなり違っていると思います。保護者と子どもとのつながりをどのように手立てしなければならぬかということは、真剣に考えなければならぬ大きな課題だと思います。

私の身近な保護者の方で、子どもさんが不登校になったことがあり、家でゲームばかりする毎日だったそうで、とても心配されていました。学校へたまに行っても存在が浮いてしまっとうまくいかないという状態でした。そこで子どもの話をよく聞いてよく様子を見てみると、ゲームの中の世界では人間関係ができていることに気づいたそうです。ゲームの内容ではなく、ゲームの中でのやりとりで問題が起き、Aの話とBの話をそれぞれ一生懸命に聞いてAとBをつなげ、仲直りさせることができました。実際の社会では会っていないけれど、ゲームの中で関係性ができていて、学校では認めてもらえないけど、ゲームの社会の中で認められて肯定感が生まれてなんとかやっけていっている。ゲームを否定してきたけれど、否定するばかりでもなかったと保護者の方が言っていました。このお話を聞き、大人が子どものしていることや思っていることをよく見ないといけない。これは大人の問題なのだと感じました。子どもたちの力を育てつつ、大人も育たないといけません。子どもへの声のかけ方、見守り方、ここにいるよという存在の表し方を私たち大人がもっと発展させていく必要があると痛感しました。

【狩野委員】 SNSの利用が進み、核家族が増え、バーチャル世界があふれる中で育つ子どもたちは、人と関わる力が低下してきているのではないかと感じています。人と関わらなくても生きていけると思っている子どもたちも多いのではないのでしょうか。

自分さえよければ他人はどうでもいい。人の命の重さを考えない。という子どもが増えているように思えてなりません。その様な環境ですからなおさら、学校において人と関わる力を育てる必要があります。防災教育を通じて、子どもたちが意見を出し合い、人と関わる楽しさを感じる子どもが増えてくれればと思います。しかし、学校訪問での授業を見ていると、教師主導型の授業がまだまだ多いと思います。今後、人と関わることをテーマに授業を進めたいという先生が増えてくれればと思います。

先日、アフタースクール広田を見学しました。一つの教室に40名近くの子どもたちがおりました。様々な学年の子どもたちが集まっていますが、非常に落ち着いていました。なぜこんなに落ち着いているのか指導員の方に聞いてみましたら、子ども同士の相性を見ながら関係性を見てうまく組み合わせで席を決めているようです。すると落ち着いて行動できるようになるそうです。このように配慮されていることにびっくりしました。また、指導員が子どもたちを見る目が温かく、これが一番いいことだと思いました。ただ、もう少し広い場所があってもいいのではないかと思います。隣の部屋を見てみると学習室になっており、放課後の補充学習をしていました。あの部屋が利用できればいいのですが、学校側でその教室を活用しているため、利用は難しいようです。

学童保育といえば子守りという意識がありましたが、アフタースクール事業により、子どもたちの生活の場となっているのが素晴らしいと思いました。子どもたちが自らプログラムを考えるとさらに行きたくなる。この状況をどんどん進めてほしいと思います。一方、大変さもあると思います。指導者の育成、講師の確保、環境の整備などいろいろ課題があると思いますが、何とか少しずつクリアしながら今後も進めてほしいです。

【山本委員】 防災教育は、こうして教育委員をさせていただくまであまり関心を持っておりませんでした。しかし毎回、活動の報告をいただく中で、知識を得、関心を持つようになりました。子どもたちも知識を得ることで防災についての意識が高まってくると思います。知識がないと、防災に関する話を人とする事もできない。小学校から防災の話をたくさんしていると思うのですが、この活動がずっと続いていくことが大切なことだと実感しています。

私は、南あわじ市消防団の幹部をさせていただいているのですが、消防団は、台風や地震といった災害時に、真っ先に救助にあたりますので、地元の若い男性がここ一番という時に頼りになると思います。今年度の賀集小学校での総合防災訓練にも参加させていただき感じたことですが、消防団と学校とのつながりをもっと濃くしてもらえたらと思います。子どもたちが将来南あわじ市で消防団に入って地元を守るという意識を持っていただけたらと思います。そういう意味では消防団についての教育も必要なのではないかと思います。

アフタースクール事業については、1か月間の各アフタースクールのスケジュールを見せていただいて、たくさんのプログラムがありびっくりしました。遊びの中で学んだり知識を増やしたり、人との関わり方を身につけたりすることが大切だと思いました。遊びや普段と違う体験から関わり方を学ぶのだと思います。職場の子どもさんもアフタースクールに入っているようで、最初は嫌がっていた子が、今では自転車で行って楽しんで帰って来ており、子どもがしっかりしてきたとおっしゃっていました。親としては、子どもがいろんな所へ出て行っているような体験をして成長してくれることは本当にうれしいので、このような場があるのはとても助かるとおっしゃっていました。今後も一層活発に進めてほしい事業です。

【本條委員】 防災教育について、正直温度差があると感じています。今年100年を迎える関東大震災は家財道具を持って日比谷公園に集まった人たちが火災に巻き込まれて大勢の方が焼死されました。阪神淡路大震災では建物の倒壊による圧死、東日本大震災は津波による水死、とそれぞれ違う状況の中で温度差を感じます。南あわじ市では南海トラフ地震を想定した防災教育に力を入れ、防災意識が高まっていますが、淡路島3市の中でさえも防災意識に温度差があると感じています。南あわじ市では、東北ジュニアリーダー研修や教育長による防災教育出前講座、舞子高校との連携等、体験活動に重きを置いた取組をされていますが、確実に将来を担う子どもたちの実践力として活かされると思います。また、避難所では小中学生が大きな動く力になると思います。クライシスマネジメントにもなると思いますので、この取組を応援しております。

阪神淡路大震災の際、避難所となっている芦屋市の精道小学校へ2泊3日のボランティア活動をしたことがあります。食事をお渡しすると最初は喜んでくださるのですが、日が経つにつれて、また一緒のものか。と不満を聞くようになりました。運営に携わる中では、様々な方がおられるため、丁寧な対応が必要であるということを経験しました。この年はボランティア元年と言われるようでしたが、ボランティアをする機会をあたえていただいたという感謝の気持ちが、仏教でいうお布施になっていると感じました。

アフタースクール事業は私も以前より注目させていただいています。厚生労働省が鍵っ子対策として子どもたちの身の安全を守るために放課後児童健全育成事業を始めたものだと思います。放課後子ども教室は、文部科学省の事業で、学校週5日制となったことによる土曜日の子どもの居場所を提供し安全を図るために始まったものです。子どもファーストで考えた時には、南あわじ市が取り組んでいるアフタースクール事業は一つ一つ着実に進んでいると思います。厚生労働省と文部科学省の補助金を活用しながら取り組まれていると思いますが、洲本市でも一歩でも前へ進められたらと思っております。

【浅井教育長】 子どもたちにつけたい資質能力は何かと聞かれたら、まずは「人と関わる力」だと答えます。コロナ禍により、ゲーム、スマホ、タブレットと過ごす時間が多くなり、家族と話をする時間が少なくなっていると思います。ネット上でも意見交換はできますし、悲しみや喜びもその中から生じるものもあると思いますが、心の中に深く刻み込まれるものではなく、表面的なものであると思います。子どもたちが成長するためには心に深く刻み込まれるような喜び、悲しみ、痛みを体験することが必要だと思います。その最たるものがスポーツであると考えています。試合に負けたときの悲しさやくやしさ。それを乗り越えたときの喜びを実体験することで、社会に出たときにも活かされていると考えています。

また、不登校や引きこもりが全国的に年々増加しています。高卒就職者は3年以内に4割が退職し、大卒では3年以内に3割が退職する時代です。この原因にはいろいろな要素があると言われていますが、そのひとつとして人間関係が培われているかが大きな課題だと思います。そこで、人と関わりながら子どもたちが成長していくきっかけになるのが、本市の防災教育やアフタースクール事業であると考えています。防災教育では、人の生き方に触れることで、自分の生き方を考え、なりたい自分を見つけていきます。アフタースクール事業では主体的に取り組むことで、自分の好きな部分や強みを見つけ、それをさらに磨いていくということだろうと思います。「学ぶ楽しさ日本一」は、防災教育やアフタースクール事業を含めた様々な取組により、子どもたちに体験してもらおうことではないかと思います。

「学ぶ楽しさ日本一」の基本的な考え方は「人との関り方」と大きく関連しています。「主体的に取り組む課題を乗り越えていく楽しさ」「チャレンジしながら人と関わる楽しさ」「他者と共に新しいものを創り上げていく楽しさ」が、南あわじ市がめざしている子どもたちに体験させたい楽しさだと考えています。子どもたちはなりたい自分を見つけ、見つかったら、それに向かって主体的に努力していく行動を、学校や教育委員会が支援していきたいと思います。

【守本市長】 皆様のご意見をお聞きしまして、感じたこととお話させていただきます。

近藤委員が、学校が頑張りすぎることで、子どもたちが学校生活を息苦しく感じているのではないかという新聞記事のお話をされましたが、良い取組をしている学校が、かえって子どもたちにとって息苦しさを感ずるようなことになっていなければいいがと思いました。

数田委員からは「想像力の貧弱」のお話がありました。想像力とは人の立場に自分を置き換える力だと常々感じる場合があります。過去、イラクの戦争が形式的に終了した後、イラクへ出張に行くことが何度とありましたが、現地ではまだ戦争が終わっていないのです。弾丸が飛んでくるのです。イラクへ出張に行く前には神棚に手を合

わせ無事帰って来られるよう祈ったものです。人の立場に自分が置き換えられるか、どうすればそういう力がつくのかと考えますと、言葉を使った創作活動もいいと思いますし、演劇なども効果的ではないかと思いました。

同じく数田先生のお話で、保護者の子どもに対する意識が薄いということですが、先日開催されたアジア子ども国際映画祭での作品を見ていますと、コロナ前のアジア諸国が作る映画は、自分が努力をすると経済的に成功できるし社会にも貢献できるというイメージのものが多かったのですが、今回は全く違って、自分たちのほしいものは物質ではなくつながりなのだということを訴える作品でした。市長賞を受賞した「STAY」という映画作品は、そのタイトルに「一緒にいたい」という意味を込めたものです。仕事の忙しいお父さんが子どもに時計をあげるのですが、子どもはそれよりもお父さんに一緒にいてほしいという思いを伝えている映画でした。アジアの国々が経済発展する中で、これまで追い求めていたものと今追い求めているものが違ってきており、社会が変わってきたことを感じました。

青木委員からは、ゲームにもそれなりの意味があるのではないかというお話がありました。ゲームを通して人と人を取り持ってつなぐことができたという成功体験から自己肯定感を感じることは大切ですが、それをスタートとして実体験へつなげていく道筋を考える必要があると思いました。

狩野委員からは広田アフタースクールのお話がありました。皆様のご意見からは、アフタースクール事業自体はとて素晴らしいということですが、少し窮屈な環境であることが課題となっております。また、資料にはアフタースクールの満足度100%をめざすとありますが、私は100%になってはいけないと思っています。子どもの過ごしやすい環境を大人が用意していますが、これをやりすぎてはいけないと、足りなくていいと思っています。本来、子どもに満足度100%になることをしてはいけない。足りなくていい。いまよりもよくするには自分たちでどうやって克服していくのかを考えてほしいというところにアフタースクール事業の意味があると思っています。誰かが解決してくれるのではなく自分たちで解決するという発想が必要だと思っています。

いずれ、総合教育会議で出すべき議題となると思いますが、少子化の中、学校をどうしていくのかということが今後の課題です。これまでは、子どもが減ったら小学校を統合して減らせばいいという流れですが、私はそれでいいのかという問題意識を持っています。子どもが少なくなるという人との関わりが少なくなるということ、そして維持管理費等のコストの問題もあります。ですが、人と関わるというやり方はいろいろあって、週に1回1か所に複数校の子どもたちが集まって一緒に活動をするとか、タブレットを活用して複数校でオンライン授業を行うなどの方法が考えられます。コストについては、校舎を1か所にまとめてしまえば、みんなきれいな設備の整った中で学校授業を受けられるのですが、世の中を生きていく成長プロセスとしてよ

いのかという疑問を感じています。設備の整っていない制約のある学校で、保護者も関わって補っていく方が、生活力のある人間に育つのではないかと思うのです。ただ、実現するには相当な議論が必要になってくるとは思います。

「夢見る小学校」という映画がありますが、あの中の一場面、みんなで渡り廊下を作るシーンがあります。雨に濡れたくないのであれば自分たちで考えて実行しましょう、とそういうプロセスを持った学びができるということが非常に大きなことだと思っています。いずれ、そんなに遠くない先に、学校を統合するのか、それぞれ小規模の学校を維持する中で何らかの取組をするのか、決断しなければならないとは思っております。

浅井教育長から、スポーツが人格形成に非常に重要な役割をするというお話がありましたが、それはその通りだと思う一方で、私は、中学校の部活動に対するトラウマがありまして、それが人格形成に寄与するかと言うと疑問なところがあります。忍耐力はつきましたが、先輩が言うことはあまり理屈に合わなくても従わなくてはならなかったという経験をしました。スポーツそのものは人格形成に活かしていくべきと思いますが、スポーツのあり方をよく考えないといけないと思います。アメリカ的な何でもかんでも実力主義というのも疑問ですが、これまでの日本のスポーツ集団のあり方が正しいのかというところは考える必要があります。そもそものスポーツの目的、特に学校でのスポーツの目的を考えないといけないと思います。

総体的には、防災教育もアフタースクール事業も今後も深めていくべきという方向で委員の皆様からご意見をいただいたように思っております。

3 その他

続きまして、「その他」に移ります。

「南あわじ市の不登校・いじめの状況」について、これは特に私から報告をお願いしたものです。10月に文部科学省から出されたデータもあるので、それと比較をしながら南あわじ市の状況を聞きたいと思います。

では説明をお願いします。

【上原次長補】 現状については、国、県、市とも、不登校は増加傾向にありますが、国県と比べますと低い割合となっております。いじめに関しては、令和3年度が突出しておりますが、学校で積極的認知が進み実態の把握をし、3カ月経過するまで様子を見ることを徹底した結果となっております。

南あわじ市では、SOS早期把握に向けてタブレットを使った取組を10月から実施しております。これは、健康課とタイアップし、1人1台のタブレットにアイコンを置き、そこから南あわじ市のホームページにリンクし、「ひょうごっ子SNS悩み相談」に24時間つながるようになっております。これはSOSの出し方に対する教育

につながっていると思っております。これまでに2件の相談がありました。相談の1件は、「隣の子がうるさくて嫌なので席替えをしたい」というものでした。2件目については、学校教育課の浜田より説明いたします。

【浜田副課長】 2件目は、「生きていくのがつらい」という相談が寄せられました。ネット上では、直接的に氏名を書くようなフォームになっていないため、担任の先生から子どもたちに確認し、本人の特定に至り、早期発見早期対応をすることができました。

【上原次長補】 つらいと思ったときにタイムリーに相談することができることが早期発見につながっていると思います。SOSの出し方に関する教育の一環としてこれからも進めていきます。

【本條委員】 不登校は、令和3年度と比較して令和4年度は小中学校合わせて約5万人の増加であったと思います。令和3年度は小学生8万人、中学生16万人だったのが、令和4年度は小学生10万人、中学生20万人となっております。その様な状況の中で、県も本腰を入れてネットワークを張り巡らし、教育事務所も動いています。

コロナ禍で学校が休校になったり、感染不安から個人的に登校を控えたりしたことから、学校へ行かなくてもいいという意識が強くなったというところもあると思います。学校に行くところこんな楽しいことがあるよ、といった前向きな気持ちになるよう導き、緊急事態が起こらないように対応していかなければならないと思っております。

小学校で不登校だった子が、中学校へ進学する時はひとつの大きなチャンスです。環境も変わり、自分の居場所を見つける機会が生まれますので、橋渡しをきっちりしたいと思います。

【山本委員】 こういうアプリは非常にいいと思います。いじめはその子によってどういうレベルか違うと思います。先生がいじめを見抜くということは、先生が育ってきた環境や経験によってもかなり変わってくると思っています。先生が子どもの立場に立った時にいじめをどう捉えるかも含め、多方面から子どもたちを見守っていただきたいと思っています。

【狩野委員】 このアプリはすごく関心があります。南あわじ市のタブレットの良さは学校、家庭、外出先のどこでもつながり使えることです。また、健康課とタイアップしているところがいいと思います。学校の先生は福祉面では弱い部分がありますので、福祉の方向からの視点があるのが非常にいいと思いました。

【青木委員】 今、実際に「ひょうごっ子SNS悩み相談」につないでみました。学校名を選択し、どういうことで悩んでいるのかを書いていけるようになっています。本人だけでなく、いじめや不登校で悩んでいる子を知っているという子もかなりいると思いますので、そういう子どもたちも活用できるようなフォームになればいいなと思いました。また、学校ではなく健康課につながってるというところも、子どもたちにとっては話しやすい面があるのではないかと思います。

あと、いじめられる子のケアはもちろんですが、いじめた側を放置せず必要なケアをしていただきたいと思います。

【數田委員】 子どもはいろいろなことで悩んでいます。でも先生には言えないという子どももたくさんいます。初期対応が非常に大事ですので、先生方には子どもたちの様子をよく見ておいてほしいと思います。クラスがおもしろくないという理由の一つに、クラスがざわざわしていて落ち着いて授業が受けられないというような、まじめな子が困っているということもあるようです。特別な指導や支援が必要な子どもが、早い段階で発見されて適切な対応をすれば社会性を育むことができるので、手厚い対応をしていただきたいと思います。

【近藤委員】 低学年の段階から人の意見が聞けたり、自分の意見が言えるという学習環境が成立することも大切なことだと思います。登校拒否と言われていた時代から不登校と呼ばれる現在はスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの様々な支援がなされています。しかしながら、不登校は増加傾向にあることから、根本的な原因があるのではないかと考えざるを得ないのかなと思います。学校の息苦しさへの対策、学校のスリム化など国主体でないと難しいところもあるかもしれませんが、先生が子どもに向き合う時間を確保するなど市でできることもあるかもしれませんので、対応いただきたいと思います。

【浅井教育長】 不登校から引きこもりに移る課題は、縦割りの対応が原因でないかと思います。自分の範疇しか対応しない、できないということもあるかもしれません。そうではなく、切れ目のない対応で社会的な自立につながらないといけないと思います。

【守本市長】 青木さんがおっしゃった、いじめる側のケアは本当に重要だと思っています。いじめる方には何かしらのコンプレックスを持っていることが多く、そのはけ口として誰かをいじめているという面もあります。そこは、先生がいじめる側をうまく持ち上げて対応すると、ちょっかひを出さなくなるということもあります。先生側にも人間的な熟練と知識を要するところがあると思いますが、そういうトレーニング

も必要ではないかと感じるところです。

4 閉 会

本日は、たくさんのご意見をいただきありがとうございました。全般的には今の本市の方向性に対し、積極的なご支援を得られたと感じておりますので、いただいたご意見を取組に反映させながら、南あわじ市の教育を今後も進めてまいりたいと思います。

これもちまして、令和5年度第2回総合教育会議を閉会いたします。

午前11時55分